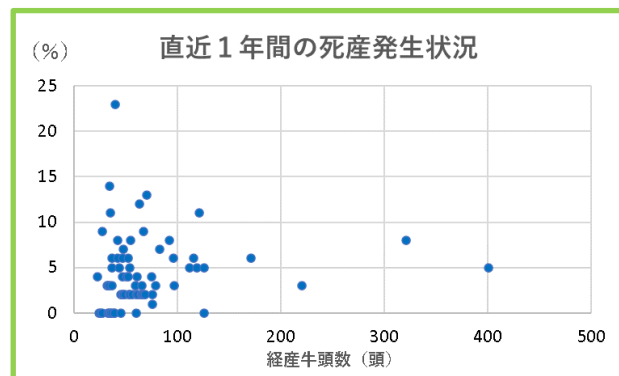


あしよろ・ハードサポート通信

新年あけましてあめでございます。今年は「丑年」、酪農家の皆さまにとって良い1年になることを期待したいですね。さて、1月も中旬となりました。気温の低い北海道では本州に比べると産子の死産率が冬季に高くなります。死産を減らすことは後継牛を潤沢に確保する上でも重要なポイントです。

◆死産率の目標と町内の傾向

死産とは、胎齢240日齢以上の胎児死亡と出生当日の産子の死亡及び廃用と定義されています。死産率の目標は5%以下と言われており、右の表では足寄町内での死産率を酪農家さん毎に示しました。全体的な死産率の平均は4.4%と低く、



中には0%の酪農家さんもあります。反対に死産率が10%を超えているところもあり、頭数規模における傾向はありませんでした。さて、死産率に影響する要因はどんなことがあるのでしょうか。

◆初産牛の死産発生リスク

経産牛に比べ初産牛では産道が狭く中でも体重の少ない個体は難産になりやすく、結果死産率が上がりやすくなります。半面、授精遅延や育成後期での栄養過剰などで初産分娩時の体重が多すぎても産道を体脂肪が圧迫し、難産の発生率が上がります。よって育成牛の飼養管理を適切にすることが死産を予防する第一歩となります。



良質粗飼料を飽食し発育の良い育成牛群

また産子が過大になるほど難産になりやすく、未經産牛や骨盤が狭い個体には種雄牛の分娩難度を確認し、比較的安産型の種雄牛を交配することや産子サイズの小さい黒毛種を選択することも検討しましょう。

◆分娩環境を整える

分娩房のスペースは1頭あたり20㎡以上が推奨され、広く寝起きしやすい環境にすることが大切です。分娩場所が狭く床が滑りやすい状況であれば、乳牛は反動を強くつけて寝起きをしなければなりません。これが子宮捻転や逆子の原因ではないかと言われています。また、分娩の偏りや分娩予定日を超過している個体の存在で分娩房が過密になる状況もあります。最近では産後の疾病リスクが少ない分娩誘起方法もあるので、獣医さんと相談のもと早めに対処することも検討材料です。



スペースにゆとりのある分娩房

◆細目に分娩を監視する

気温の低い冬季では、産子の出生後から酪農家さんが発見するまでの経過時間が長くなるほど死産のリスクが高まります。また産子が低体温症になってしまった場合は初乳の吸収能力が低下し免疫移行が不十分となります。分娩があることを常に意識して、分娩予定牛は夜間でも細目にモニタリングをすることが大切です。最近では分娩房に監視カメラを設置する酪農家さんも多く、遠隔でモニターすることが出来る便利なアイテムです。



監視カメラで分娩を観察

◆ロスを減らし投資資源を増やす

双胎による難産や奇形児など対応が難しい場合もありますが、死産となってしまった牛は販売することも搾乳することもできません。経済的に言い換えると投資する資源を失います。子牛から手間暇をかけて投資した分、乳牛は後で応えてくれますよね。死産が多い際は理由を掘り下げて対策を考えてみましょう。(船久保 雄二)

